マリーエン広場で――新交通規制――

大詩人ヨーゼフ・ディングは一五二〇年にこう言いました。「この空の下、何も目新しいことは起こらない」――この男の言い分は正しくない、というより、この人は今日のミュンヘン市マリーエン広場に出かける機会に恵まれてなかったんですな。百年前のマリーエン広場（マイリンガー・コレクションをご覧下さい）――今日のマリーエン広場（マリーエン広場をご覧下さい）。

踏台（かつては馬）に乗った警官や徒歩の警官が任務についております。マリーエン広場は混雑をきわめています。大勢の人々、子供たち、自動車、自転車、犬、鳩、時計台の鐘、市電、敷石、安全地帯、水たまり、アーク灯、吸殻、期限切れの市電の切符、電線、ガソリンの悪臭、等々。これらが現在のマリーエン広場の小道具です。これらの小道具がどう動いておるか？――警官が指揮をする――が、人々は従わない。ただポカンと口をあけて見ている、あっけにとられている、眺めている、にやにやしている、あざ笑っている。人々はいまだ古き良き時代の行動様式から抜け出せないのです。大都会の交通に慣れようとはせんのです。――自動車は警笛を鳴らす。自転車乗りは待つ。犬は邪魔をする。鳩は飛ぶ。時計台の鐘は高らかに、また「音の狂いなく」響く。市電は走り来て、走り去る。敷石は踏まれる。安全地帯も同様。水たまりもこれまた同様。アーク灯はともる（晩には）。吸殻は転がる。投げ捨てられた市電切符は舞い飛ぶ。電線はクモの巣のように揺れる。ガソリンの悪臭は来る日も来る日も。だからしてすべてが耐えがたい。

交通警察は最善をつくそうとはしています。だが我々市民は今もって村人なのです。――警官がこうすると――我々はこう歩く。警官がこうすると――我々はこう歩く。――こういう風になるはずなんだが、そうはならない。ことによると十年後にはうまくいくようになるかもしれないが、それでは遅すぎるというものです。それまでには我々はみんなけがをしてしまうでしょう。――そこで私に交通規制について新しい考えがあるのです。迷える者すべてが私に心から賛成することでしょう。

私の基本方針は次の通り。

月曜はミュンヘン全市、自転車のみ走行可。火曜は自動車のみ。水曜は辻馬

車のみ。木曜はトラックのみ。金曜は市電のみ。土曜はビール運搬車のみ。日曜と祝日は歩行者のみ。こうすればもう誰も轢かれないでしょう。

第二の案は次の通り。

午前六時から七時まではミュンヘンの通りは自転車専用。七時から八時までは自動車専用。八時から九時までは辻馬車専用。九時から十時まではトラック専用。十時から十一時までは市電専用。十一時から十一時十五分までは時計台の鐘専用。十一時十五分から十二時まではビール運搬車専用とする。